

ンナシの耐寒性と脂質含量に及ぼす影響．園学研 9, 339-344.

宮本善秋ら 2004. モモ幼木への秋季摘葉処理による樹体内糖含量の低下と凍害の人為的誘発．岐阜県中山間農業技術研究所研究報告 4, 32-36.

宮下博行ら 2024. 石川県内の水田転換園における暗渠施工と土壌改良資材の植穴施用による土壌物理性の改善とモモ幼木期の凍害に及ぼす影響．日本土壌肥科学会講演要旨集 70, 115.

長野県果樹試験場 2013. リンゴ，モモの樹

体凍害軽減技術マニュアル～白塗剤・稲わらに替わる新資材活用マニュアル～．

酒井昭 1967. 植物の耐凍性．化学と生物 5, 73-79.

Sakamoto, D. *et al.* 2017. Application of livestock waste compost as a source of nitrogen supplementation during the fall-winter season causes dead flower buds in Japanese Pear 'Kosui'. The Horticulture Journal 86, 19-25.

瀬古澤由彦・弦間洋 2003. 果樹の凍霜害防止対策の現状．植物の生長調節 38, 240-

248.

富田晃ら 2025. 台木の違いがモモ若木樹の枯死発生および生産性に及ぼす影響．山梨果試研報 21, 1-10.

八重垣英明ら 2016. 'ひだ国府紅しだれ' 台木の凍害抑制効果に関する連絡試験の概要．果樹研究所研究報告 21, 43-52.

吉田静夫 1999. 極限温度に対する生理応答．pp. 24-35. 渡邊昭ら監修．植物の環境応答—生存戦略とその分子機構．秀潤社．東京.

田畑の草種

銀杏浮苔 (イチョウウキゴケ)

須藤 健一

ウキゴケ科イチョウウキゴケ属の日本で唯一の浮遊性のコケ植物。北海道から沖縄まで全国に分布する。ウキクサ等に混じって水田や池等に浮遊するが、泥の上でも陸生形を取って生育できる。多年生で暖かいとほぼ1年中生育するが、氷が張るようになると赤くなって枯れる。1属1種。日本在来ではあるがほぼ全世界に分布することから汎世界的な種である。

一般にコケ植物(苔類)は植物の体の構造として、根、茎、葉の区別がはっきりせず、全体が平らで分化していない構造の葉状体を持つが、イチョウウキゴケの葉状体はイチョウの葉のような形をして扇状の半円形をしている。長さは10～15mm、幅は5～8mm程度で、表面に浅い溝がある。葉状体の内部には気室があり、それによって水に浮くことができる。表面は濃緑色～青緑色を帯び、時に多少赤みを帯びることもある。

葉状体の裏側には、紫色で柔らかく長さ5mm～15mmほどの鱗片が多数垂れて根のようにみえる。これは腹鱗片と呼ばれ、乾燥から保護したり水分を吸収したりする役割を持つ。一方で水がなくなってくると腹鱗片はあまり発達せず、仮根が伸び陸生形として生育する。

雌雄同株で雌器、雄器ともに葉状体のなかに埋もれている。イチョウウキゴケの場合、コケ植物であり種子は作らないが晩秋に胞子を形成する。一方、栄養繁殖が旺盛で、銀杏の葉のような形の葉状体が半円を超えるようになると二つに分かれて増える。これを二分分裂というが、強光下など環境条件が良ければ倍々ゲームのように増えていく。

ところで、環境省などのHPによると、イチョウウキゴケは、かつて田んぼの乾田化や除草剤の使用などで絶滅が心配され絶滅危惧Ⅰ類に指定されていたことがあった。しかし今では「準絶滅危惧」のカテゴリにまで格下げされている。準絶滅危惧種とは「現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては『絶滅危惧』に移行する可能性のある種」のことをいう。さらに、本種は全国に分布するが、HPによると秋田、宮城、福島、愛媛、大分の各県では未だに絶滅の危機に瀕している種(絶滅危惧Ⅰ類)と位置付けられている。一方で、筆者の

住む兵庫県では準絶滅危惧でもないことから、絶滅という心配は少ないのかもしれない。実際に、筆者の住む近所の田んぼでイチョウウキゴケが稲の株の間に浮遊しているのを見ていた。特に観察していたわけではないが、その田んぼのイチョウウキゴケは、田んぼ全面に発生していたわけではない。一部分に見られただけであり、それもウキクサやアオウキクサと一緒に浮遊していた。田んぼの水を出し入れするとき、ウキクサやアオウキクサは塊として動いていくがイチョウウキゴケはさほど動かないように思う。葉状体の縁からはみ出すように広がっている腹鱗片が水の抵抗に逆らって踏みとどまろうとしていたのだろうか。隣接する田んぼにイチョウウキゴケが広がることはなかった。

しかしそのイチョウウキゴケが見られた田んぼは、5年ほど前から耕作が放棄され、今ではヒレタゴボウが優占する放棄田になってしまっている。イチョウウキゴケが絶滅危惧にカテゴリ化されるのは、そんな耕作放棄田の増加などが関係しているのかもしれないと思ったりする。そうすると兵庫県のイチョウウキゴケが準絶滅危惧種とされるのも時間の問題なのかもしれない。

